

# 本と社会

「人文ネットワーク」ニューズレター  
2002年12月20日 第3号

●発行元 人文ネットワーク  
●印刷 (株)新栄堂 ●編集制作 (株)新評論編集部  
●事務局 (株)新評論編集部内(担当:吉住)  
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田3-16-28  
Tel.03-3202-7391 Fax.03-3202-5832  
E-mail: shrn@eagle.ocn.ne.jp

人文ネットワークは、読者・著訳者・編集者、さらにできれば書店・印刷所の方々とも連携して、我が国の人文書出版の現実、すなわち、単なる利便性や拙速性や広範性のみに腐心する本づくりの現状を批判し、その現実を改革しようという会です。私たちは、人文書が構想され制作され流通する現実のプロセスの全体を視野に収めつつ、特に制作プロセス、本づくりの現場に注目しながら——つまり我が国の出版の社会的現実における個々の人文書の具体的な生産現場と切り離すことなく——、定期的な読書会を通して一冊の人文書を読解します。それは、人文書の内容の読解と、その社会的な現実存在の理解との連結です。当ネットワークは、本づくりのためにではなく、自らの本づくりのあり方を考え改革するために、まずは著訳者と編集者という当事者同士が出会う場として設定されました。私たちはこの作業を通して新たな現実的知性の発見を目指します。このニューズレターはこうした私たちの活動の一部をご紹介させて頂くものです。

## 巻頭インタビュー

✦ 『駄菓子屋楽校』著者  
松田道雄氏に聞く

## 社会運動の新しいかたち

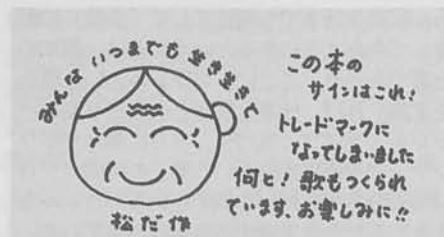
●「駄菓子屋」をキーワードとした大変ユニークな社会文化論をこの夏に上梓されましたが、まず、本という形を選んだ理由をお聞かせ下さい。  
松田 この本は、研究者のための研究書ではなく、市民のための研究書(思索の書)です。これが、私が本にした最大の理由であり、きっと、これを本にしてくれた新評論の編集者もそこに共感していただいたのではないかと思います。私は、研究者ではありません。中学校の教員です。しかし、同時に様々な社会的活動もしています。調べたのは駄菓子屋です。しかし、そこには現代社会の対抗文化的な意義がありました。調べた地域は山形です。しかし、そこには普遍的な広がりがありました。だから、提案体として一つのまとまった本という作品にしたのです。

●本づくりのプロセスはいかがでしたか。  
松田 この本は、大きく三つの要素から組み立てられています。一つはフィールドワークによる聞き取り、二つは膨大な文献調査、三つは私の実践活動です。特に本の多くは公立図書館を利用した点で、「本は学者の専売特許」という俗論を打破したとも言われました。さらに、私のこれまでの共同活動による経験から、この本づくりも編集者とのコラボレーションによって生まれました。私は、超発散型で風呂敷をどこまでも広げていくタイプです。それを編集者が現実的に引き締める役割だったので、編集の方には頭を悩ませた仕事だったと思います。

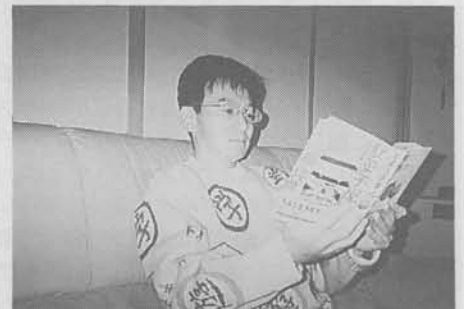
●出来上がってみて、手応えはどうですか。  
松田 この本は、私にとって初めての本づくりで、出来上がりは想像できませんでした。出来た本をいただいた時は、父親が生まれたばかりの我が子を見るような感じでした。書

店や多くの方々からは、まず表紙が楽しいという声。駄菓子屋の模型を作ってくださいました「工作おじさん」に感謝！内容は、田舎教師の著作に対して「読むスタミナ料理に舌つづみ」、「子ども文化論のみならず日本文化論の画期的な仕事」など過分なことを頂きました。映画評論家・佐藤忠男氏の書評(『週刊朝日』'02.10/4号)に、私が聞き取りした駄菓子屋のおばあちゃんの話が載っていましたが、それが一番の説得力だったかもしれません。

●どんな説得力ですか？  
松田 私の造語で言えば、隣人類、常人、社会的オバアの説得力です。メディアを使った遠くの誰かや文献ではなく、あなたの隣りや近所の人、いつもそこにいて安心できる人(客人と対をなす概念)、社会的オジの老人力版の話、その中で近代の大人社会が最も忘却した象徴が駄菓子屋の店主だったのです。



●この本自体が一つの社会運動だと思いますが、松田さんの運動理念をお聞かせ下さい。  
松田 各人が天分を生かし、生活者として生きる、ということです。現代社会の課題は、とにかく学校に行き就職して会社人間として



松田道雄氏。山形の自宅にて(プロフィールは次頁)

奉公して...、という急がされた人生の中で、自分の天分を見出していない、生かされていない、しかし見出したい、もっと生かしたいと大半の人が思っていることです。これを克服するには、職業人の技能を生活者としても活かし、誰もがいったん生活者に戻って自分の生活を作り直し、そこから天分を見直す作業が必要です。中学教員である私が、実際に週休日に駄菓子屋の前で「楽校」を開き(次頁「この本と私」参照)、生活者に向けてこの本を書くこと自体、その一つの実践です。

●松田さん命名の「生活作り方運動」ですね。  
松田 こちら東北の山形では、昭和はじめ、農作業などの「生の現実」体験を子どもたちが教室で綴る「生活綴方運動」(提唱者、国分一太郎)がおこりました。しかし、今必要なのは、実感できる「生の現実」生活そのものを作り出すことなのです。これが私の提案ですが、その教師は「みんな」なのです。(インタビュー/文責:新評論編集部、'02.11.19)

田 『駄菓子屋楽校—小さな店の大きな話・子どもがひらく未来学』松田道雄 著  
老若男女の夢空間＝「駄菓子屋文化圏」の歴史を丹念に辿り、その発展的復活への道筋をユニークな着想と実践で描く壮大な文化再生論。四六判上製・608頁・税込3675円・新評論刊

# 連射砲のような「文化力」

●蔵持不三也 (1946年生れ、早稲田大学教員/文化人類学)

恥じらい、衒い、笑い、涙、危うさ、確信、こだわり、いじめ・いじめられ、反省、優しさ、友情、いがみ、喧嘩・口論、憎悪、仲直り、あざとさ、駆け引き、わがまま、魅惑、反撥、妬み・嫉み、自慢、自惚れ、誇示、そしてささやかな恋心…。駄菓子屋への遠い郷愁を語る言葉はことほどさように際限ない。だが、本書の真骨頂は、そんな駄菓子屋のイメージを単なる郷愁のうちに押し込めるのではなく、むしろ際限なく増幅させ、それを著者の教育フィールドとして闊達に光景化したところにある。闊達。そう、これほど闊達な書は、そうざらにあるものではないだろう。



『駄菓子屋楽校』カバー

まずはその造語である。「ダガシヤ・ボランチャア」「ダガシヤ・ベンチャー」(両者を足せば「ボランチャー」)、「自分史図書館」、「通楽路」、「民俗文化療法・駄菓子屋療法」、「団欒道路」、「子どもデイケアセンター」、「生活・自然楽校」、「ダガシヤ期」、「緊張弛緩店」、「出島みせ」、「雑木林教育」、「隣人類」、「遠人類」など、本書前半部でもこれだけある。総ざらいすれば、それだけでこの紙幅が完全に埋まるだろう。その「文化力」たるや、さながら連射砲のようでとどまるところを知らない。だが、何といても極めつけは「楽校」である。これ一語で本書の世界を過不足なく開陳してしまうからだ。言い得て妙とはこのことを指すか。

ましてや、随所に配された大胆な概念模式図。巻末の研究用の課題例と実行用の提案例。さらに、駄菓子屋の原型とされる江戸時代の番小屋からの歴史を跡づけ、玩具や遊びの文化を滔々と論じつつ、ダガシヤ・チルドレンの可能性と創造性とに満ちた世界を余すところなく描き出し、はては「ナラティブ・セラピー」や「セレンディピティ」すら援用する。加えて、自らのフィールドワークに基づきながら、教育学はもとより、歴史学、社会学、文化人類学、心理学といった学問領域の先端的な精華を横断的に消化し、教育理念と方法論と実践とを語る。まことにガランチュア的胆力である。そして、気がつけば、ほかならぬ本書自体が「駄菓子屋」となっている。まことに心憎いばかりの仕掛けといえる。



★左、和紙面「だがしやばあちゃん」とボン(木村蔵六・作) ★下左、「森の駄菓子屋楽校」模型(亀村正浩・作) ★下右、自らデザインした「地球着」を着る著者。前にアメリカ大陸、背にユーラシア大陸を抱く!



## 駄菓子屋楽校から飛び出した手づくりのグッズをご紹介します

著者・松田氏と仲間がアイデアを出し合っ、『駄菓子屋楽校』の本の中から、いろいろなグッズが生まれました! 通販販売実施中。作ってみたい、飾ってみたい、着てみたい方は新刊論内・(駄菓子屋楽校グッズ)普及委員会事務局までお問い合わせ下さい。カタログをお送りいたします。

## 松田道雄氏 プロフィール

1961年生れ。生れも育ちも現在も山形県山形市。中学校社会科教員のかたわら、社会活動と社会提言を行なう。1993年、「壁画とニット」運動でロレックス国際賞佳作受賞。パッケージ・デザインで地域散策する「バック・テレーン」考案。その他、「積み器」・「地球着」などの学びのデザイン・楽習用品づくりを企画。「だがしや楽校」などの校外楽校も開き、天分探しや企画づくりのワークショップを展開中。自称「着想家」。

# パラレルな世界、『駄菓子屋楽校』

## この本と私 ☆ 次作『天分楽校』制作中!

『駄菓子屋楽校』で、私が社会に提案したのは、「パラレル」(並行)という概念である。

私は駄菓子屋をフィールドワークして駄菓子屋の意義を考察したが(それが本著になった)、同時に、駄菓子屋の意義を現代に再生する試みとして、「だがしや楽校」と名づけた集いを学校休日の土曜日に行なった。

「だがしや楽校」は、駄菓子屋の前の公園など(子どもが集う場)に地域の老若男女が集い、お祭りの屋台のようなイメージで、各人がめいめい「遊びと学びの屋台」を開くというものである。別に屋台を開かなくても、かまわない。かつての地域生活のように、集まるだけでも、話が生まれ、子どもは遊びを始める。

地元の大学生なども参加したが、彼らには、学校とは異なるもう一つの「教育実習」と説明した。実際、仲間の美術や理科の学校教員も、学校の授業で行なう工作や実験をここですると何がどう違うかを感じている。そして、子どもたちも感じている。学校では生徒であるが、ここでは先生になることもできるし、それらの役割以前の間づきあいがあるのだ。かつては当たり前にあった、このよう

## ●松田道雄 (本書著者)

な自由な人づきあいと「生きた学び」を再生してみる実験が「だがしや楽校」である。それは、だれもが、職業とは別にパラレルに持つべき生き方である。

高度経済成長以降の近代生活の克服点は、人々が「会社」人間として、地域生活はもちろん家庭生活までも犠牲にして「会社」に献身してきたことにあるということは、周知の合意であろう。ここに、パラレルという概念を意識すれば、仕事と家庭という当り前のパラレル・ライフに気づき、さらに趣味やボランティアや市民活動という第三の時間で、自分の天分や生きがいを探すというパラレルな生き方が社会に定着すると私は考えている。

学校教員が学校外で楽校をつくり、調査研究とともに実践活動をし、夜仕事で本著を書き上げた私のパラレルなスタイルそのものが社会提案なのである。このことは、スタディ・ブック(研究編)『駄菓子屋楽校』とともにリビング・ブック(人生編)『天分楽校』(仮題、近刊)を、コンセプト・ブック(理論編)『駄菓子屋楽校』とともにプロジェクト・ブック(実践編)『だがしや楽校に行こう』(仮題、近刊)というパラレルな本づくりでも表現している。

## 書店からの声

### ●山形・八文字屋本店 鳥谷部 昭子

今年の夏のレジ前平台は『駄菓子屋楽校』で賑わいました。まさにその昔なつかしい駄菓子屋を店内に再現すべく、50年間実際に使い込んだ木製の階段式商品展示台を駄菓子屋さんからお借りし、本の表紙にもなった駄菓子屋の模型や数々の駄菓子・おもちゃを配置するなど当店としては久々に熱の入った展開となりました。特に40代から60代ぐらいのお客様が多かったようですが、コーナーを見て声をかけて下さる方もいたり、また、途中、著者の松田氏と一緒に模型を作って下さった方や駄菓子屋のおばあさん等が立ち寄って下さり、大いに話に花が咲くなど、この本を通してお客様はじめ沢山の方々とのコミュニケーションのきっかけにもなったと思います。かつて駄菓子屋に集まった子どもたちの世界がひとつの子ども文化論として結実したこのユニークな1冊。論じるだけでなく、実際に行動し実践する生きた教育論として、これからも注目していきたいと思ひます。

八文字屋本店を訪れた駄菓子屋の木製展示台の提供者「佐々木商店 佐々木サダヲさん」



人文ネットワーク 新たな現実的知性の発見へ! / 「駄菓子屋楽校」の歌、2003年春、CD出ます!

# 座談会／『駄菓子屋楽校』 小さな店の大きな話・子どもがひらく未来学 を読む

2002年11月2日、早稲田大学人総研分室において、著者の松田道雄氏を囲み、桑田禮彰、土屋進、大野英士、白石嘉治、出口雅敏が参集。議論は、子ども観に始まって、学校教育と学校外教育の問題点、子ども社会と大人社会との関係、また駄菓子屋の世界と学校的世界それぞれの魅力の結合可能性にまで及んだ。以下、各人の発言の要旨を記す。(編集/出口)

## サブカルチャーとしての駄菓子屋的世界

白石 駄菓子屋の世界を「サブカルチャー」という位相・問題圏に接続して把握することに、個人的な興味を覚えました。サブカルチャーの問題は、「共同体」「共同性」をめぐる議論ですが、近年の「公共圏」「公共性」をめぐる議論においても無視できない視点です。



座談会風景。はるばる山形から、大人版の駄菓子屋楽校、居酒屋楽校を仕掛けてきた著者(左上)

さて、このような把握から浮上する、著者の問いかけとは何か？ それは、駄菓子屋的世界＝サブカルチャーの側から、ある種の「共同性」「公共性」を実現できないか？という、まさしく現代的な問いです。駄菓子屋の世界を現代社会に位置づけ直そうとするこの本の意義を、私はそのように受け止めました。

類似した視点から、かつての「文芸カフェ」を描いたものとして、ハーバーマスの『公共性の構造転換』が挙げられるでしょう。

## 駄菓子屋的世界から学校的世界への接近

桑田 駄菓子屋の世界の魅力は、人間も出会いも、けっして「記号化」されない関係性にあります。つまりそこには、社会的役割(記号化)を越えて現れ出る人間存在との出会い、生身の人間との出会いがあるのです。

そのような出会いにおいて、私たちは次のことを求められます。つまり、手前で一瞬立

ち止まること、よく注視すること、また、理解したり馴致するには異物感や抵抗感が伴い容易ではないので、そのために膨大な時間を費やすよう心がけること、などです。

私が提案したいのは、こうした駄菓子屋的世界にベースを置きながら、学校的世界の魅力に接近し(たとえば、純粋な知的魅力)、いかにすればそれらを取り込めるのか、という視点です。そのためのアイデアが、この本には一杯詰まっています。

## 田舎の子どもと都会の子ども

出口 「田舎と都会では、子どもの置かれている環境に決定的な違いがある」という座談会での著者の発言に、ハッとさせられました。

おそらく、オルタナティブ教育運動としての駄菓子屋運動も、田舎と都会では、提案・実践される意味も背景も異なるはずだ。

駄菓子屋「以後」、子どもたちが成長し暮らしてゆく大人社会では、「中央/地方」の格差が明確に現れるし、自覚されもします。就業や進学、生活上の選択肢の少なさから、田舎の子どもは、地元を離れるのか？ それとも残るのか？ 残るのではなく、残された場合、自分の拠り所を何に見出すのか？ 考えます。

だから、私たちが子どもや教育について考える場合も、安易な一般化は慎みたい。子どもが置かれている「環境の種別性」、背景に潜む「不平等」を見失う恐れがあるからです。

## 子ども社会と大人社会

土屋 子どもに社会的な決定権がない以上、子どもが置かれている世界を真剣に考えることは大人社会の責任です。その意味で、現場からの著者の発言・提案は貴重です。ただ、それが行き過ぎて、大人が子どもに「遊び」を押しつけてしまう危険性はないでしょうか。また、遊びや教育の仕方を変えるだけで、問題は解決できるのでしょうか？ むしろ「駄菓子屋」を提起した背景には、大人社会の問題が横たわっているのではないかと。こう考えれば、子ども社会を包含する大人社会に踏み込んで問題を提起する必要があります。

また、「暴力性」など負の側面も含めて子ども社会を語ることで、「駄菓子屋」の持つ「社会性」が単なる「ノスタルジー」を超えて、社会の深みにまで錘を垂れていることに皆が気づいていくのではないのでしょうか。

## 小さな戦略と大きな戦略

大野 「公教育」(学校教育)には限界があるが、「私教育」(学校外教育)には自由を育む空間がある、という前提には、以前から疑問を抱いていました。なぜなら今日、公教育の場も私教育の場も、ますます「管理化」が進行しているように私には思われるからです。ではどうしたらよいのか？

著者が提案・実践する駄菓子屋運動のように、私教育的立場から「小さな戦略」を立て、個人や地域社会の次元でボランティア的に教育改革を進めてゆく意義を私も認めます。ただ、行政次元での教育制度の見直しについても考える必要がある。つまり、公教育的立場から「大きな戦略」を打ち立てる必要があります。



大人の楽校

## いくつかの質問に答えて

松田 子どもの遊びを変えれば問題は解決されるのか？という質問ですが、もちろん駄菓子屋体験で全ての問題が解決されるとは私も考えていません。なぜ大人が子どもに遊び方を教えるのか？という質問ですが、「押しつけ」というネガティブな面よりも、むしろ大人が子どもにとって良いと思われる環境を作り、後は子どもたちの判断に任せるというポジティブな面を大事にしたいと考えています。

教育現場の限界についての指摘もありました。私自身は学校教育に携わる場所から発言・提案をしてきました。当面は、駄菓子屋楽校という学校外教育と、パラレルに実践してゆくなかで模索したいと思います。

## 1冊で12冊分の人文書『駄菓子屋楽校』

- ①教育論・学校論(脱学校論、オルタナティブの展開)
- ②(教育)社会学論(デジタル社会の対抗文化論)
- ③教育行政論(学校教育の制度改革へ向け)
- ④市民社会論(生活者ネットによる社会運動の実践)
- ⑤高齢者・福祉論(人生論、癒し、老若共同参画社会論)
- ⑥建築論・まちづくり論・都市論(多世代都市空間論)

◎著者は、この本が「ハリウッド・ポッターを超える」と言っていたが…。それでも、ホグワーツ魔法学校ではなく、駄菓子屋楽校も、善美にあなたの周りのどこかに増えつつあります。

- ⑦デザイン論・遊び論(デザインのマンダラ宇宙論)
- ⑧サブカルチャー論(駄菓子、おもちゃ、ゲーム…)
- ⑨子ども論(P.h.アリエス等の歴史学との関連)
- ⑩日本文化論・昭和文化史・下町論・江戸東京学
- ⑪芸術論(博物館、チルドレンズ・ミュージアムとの関連)
- ⑫大学生向け(駄菓子屋から広がる様々な研究課題・提案が満載)

\*この本はあらゆる本のジャンルとリンクしています。書店の棚構成・フェア等へのヒントとしてご利用下さい。

座談会を終えて 座談会は冒頭で、松田さん持参の山形の地酒がふるまわれ、真昼からテーブル面の駄菓子をつまみに、まさに大人の楽校気分！で進行した。この昼夜を逆転させる心憎い演出に加え、上下さかさの「地球着」セーターを着た松田さんを囲んでいると、あたかも本当に、この惑星の自転や地軸が反転し始めた錯覚を起こす。大人になりすぎた私は酔うほどに、あの時代めがけて、自分の時間軸を駆け下りていった。(出口)

# 私の駄菓子屋的提言 —— 大人社会の変革へ向けて

## 子ども世界の自律性の尊重

●桑田禮彰 (1949年生れ、駒澤大学教員/哲学)

大人は、子ども世界の現住人ではないのに元住人であったせいで、自分がその世界を理解していると思ひ込みがちだ。ただのノスタルジー程度なら無害であろうが、子ども世界への元住人の積極的介入ということになると、この「理解」が大きな問題になる。

子ども世界に踏み込む元住人には、「境界線を越える」という厳密な意識、その世界の最も重要な原理を忘却してしまっているかもしれないという怯えにも似た自覚、その結果自らの権力に無自覚でノスタルジーに眼が眩んだ元住人による有害な「善意の押付け」の危険性についての明確な認識、要するに「子ども世界の自律性の尊重」の姿勢が必要である。

「自律性の尊重」とは、何もしないことではない。それは、子ども世界の美化をきっぱり排除し、あらためてその世界の現実を冷静に見極め、その世界の原理に添うかたちで、その世界に関わることである。子ども世界には、激烈な闘い、差別、序列化がある。この否定的な現実を、子ども世界の創造性に結び付けながら、子どもならではの優れた問題解決法を示唆することが、魅力的な異邦人としての大人の腕の見せ所である。

## 「文学フリマ」に見た幸福の論理

●白石嘉治 (1961年生れ、上智大学他、教員/文学)

先日、初の「文学フリマ」が東京・青山で開かれた。プロ・アマを問わず同じ条件で、自分の作品をテーブルに並べて即売する試みである。同様のスタイルはマンガでは定着しており、その代表的なものは年2回数日間の開催で100万人を動員する。むしろ「文学フリマ」はそれには遠く及ばない規模だが、私は会場で不思議な幸福感に包まれていた。

私は『駄菓子屋楽校』の著者と同年であり、80年代に青春をすごした世代である。当時はポストモダンと呼ばれる思潮が隆盛し、離散的で断片的であることの価値が称揚された。一方で、その対極にあるものとして、共同体的な営みはことごとく斥けられる傾向があった。

「文学フリマ」の魅力。それはかつて味わった駄菓子屋での体験に通じている。そこにはいわば駄のフラットな集合体としての魅力があり、断片的なものがその固有の価値を失うことなく共有されていた。離散的でありつつも共同的な場が成立していたのである。ポストモダンでは見失われた光景。私はこうした駄菓子屋的な幸福感の自律的な生成の試みとつねにともにありたいと思う。

## 私の(没)駄菓子屋的提言

●大野英士 (1956年生れ、早稲田大学他、教員/文学)

小さい頃、駄菓子屋に行った記憶はあまりない。したがって駄菓子屋に郷愁を感じることもない。駄菓子屋的なものに価値を見いだせない人間である私にいかなる駄菓子屋的提言が可能だろうか。

松田氏の本を読んで、一番ショックだったのは、現在の学校で行われている授業の「指導案」をめぐる話だった。教員は指導要領にもとづいて一種のシナリオを作成するが、そこには生徒の側の反応まであらかじめ予定調和的に盛り込まれているという。日本の管理教育は世界的に有名だ。将来の創造性につながるいかなる自由な思考や感情の発露も、生徒がそれを表現する以前に前もって刈り取ってしまう。「左翼」的な教員組合に属する教員が生徒を洗脳するのを阻止するという妄想的な使命感ゆえか、官僚は教員を人格的な存在と認めず、指導要領や管理規則で縛りつけてきた。学校空間の中で失われた自由を、学校の周縁に別の極を配することで、回復しようというのが駄菓子屋的戦略の本質であるように私には思える。しかし、変えなければならないのは、まさにその学校空間であり、必要なのは教育を官僚から奪い返す政治的決意だ。

## サンタクロース同盟

●出口雅敏 (1969年生れ、モンペリエ第3大学博士課程/文化人類学)

子どもと大人の関係を考えるとき、サンタクロースの思い出は象徴的だと思う。レヴィ=ストロースが指摘したように\*、サンタクロースは、私たちの社会を分割している。つまり、サンタを信じる「子ども」と、サンタを信じない「大人」とちとだ。大人は、子どもが異なる世界の住人であること、他者であることをサンタクロースに告げられる。

しかしだからと言って、二つの世界は遠く隔てられたままではいない。二つの世界の間には、交換=交感がある。それは、プレゼントという目に見える形を取るが、同時に、「サンタは信じないがサンタを守る」という、子ども世界に応えようとする大人世界の「気遣い」も贈られるのだ。子どもと大人の間には、サンタクロースを介した同盟が約束されている。

ところで「サンタなんかいない。大人に騙されていた」、というサンタ喪失体験は同盟の破綻であり、それは子どもの大人世界に対する信用失墜の端緒にもなる。とはいえ、同盟を破綻させることで私たちは大人になり、サンタクロースの思い出に抱く想いは、あの時代に同盟を結んでくれた大人たちへの信頼と、今の子どもたちと結ぶ同盟の幸福感だろう。  
\*C・レヴィ=ストロース/中沢新一訳・解説『サンタクロースの秘密』(せりか書房、1995)

状況雑感

## 駄菓子屋とコンビニは ●土屋 進

(1949年生れ、中央大学他、教員/現代思想)

### 二つの時代の象徴かもしれない

駄菓子屋は消費社会へのプレリュードだ。働き蜂社会が進み、もう一方では核家族化が進むなか、家族の枠からはじき出た団塊の子どもたちは、放課後という時間を発見し、空き地や駄菓子屋という空間を発見した。解体しつつある旧来の親子関係を物を媒介にした関係で補修する社会機能も持ち合わせていた駄菓子屋は、同時に子どもを消費社会のサイクルに繋げていく場でもあった。

とはいえ駄菓子屋空間には知の原風景がある。本来の「売買」機能の外側に、子どもの目の高さで置かれた駄菓子屋の展示台は、ものを一覧できるように配置されていた。子どもの知覚と記憶のレベルで、「分類と比較」という知の基本が無意識に身に付くようになっていた。また薄暗い店は、「発見の場所」だ。五円玉を地べたに落とし、陳列台の下をのぞき込むと真つ暗な別世界がまっかりと広がっているではないか。ふと気づく陳列台の傷のわずかな変化は、「時間の流れ」を教えてくれた。そして強い陰影を生み出す裸電球は、その傷を「さまざまな形」で見せてくれた。全てが無意識のうちに、さらに子どもにとって売りものは素材にすぎない。「ペイゴマ」はヤスリで徹底的に形を変え、回転バランスの良いものにし、回転したときをイメージして色つけをしていたものだ。

こうした駄菓子屋がコンビニに変わり消え去るのは子どもの消費空間ではない。知の原風景だ。

編集後記▶ 当会第6回例会は11/2『駄菓子屋楽校』読書会の形で5時間に渡り執り行われた。冬支度目前の山形より遙々駆けつけて下さった著者松田さんに心から感謝申し上げたい▶ 氏との付き合いは6年前、中学教員から大学へ再入学した彼が本書の基となる修士論文の一部を送ってくれたことに始まる。これを材料に社会への提案書を原稿450枚に書き下ろすことでこの本の企画はスタートした。が、4年後には1500枚もの束を受け取ることになる▶ 啞然。だが、そこに山盛りされた着想と提案は、まさしく「行動基盤の書」に備する具体性を湛えていた。ただ、読み手の都合、製作費の高さを考えると、これを商品化するには大きなリスクを伴う。内容を大幅に再構成し、論旨を引き締め、価格をぎりぎりに抑えて採算売上ラインを2500部に設定し、販売体制を整えた。氏も販売に全面協力となった。地元書店、商店との連携、読者への丁寧な対応、講演会、そして持ち前の着想力で多彩な宣伝活動を自らの社会運動の一環として今も実践されている▶ 本は売筋を狙って作る訳ではない。心底普及したいから作るのであり、それ故売力が生れるのだ【『駄菓子屋楽校』編集者】